開館20周年を迎えた熊野古道なかへち美術館

田辺市立美術館へのきもち⑲

2018年3月25日。熊野本宮大社からほど近い熊野古道の森の中での出来事である。昼間にも関わらず、物音ひとつしない。これまでの人生の中で、昼間に聴いた音としては、最も静寂を感じた瞬間だった。青々とした空の広がりを見ながら、常緑樹林の匂いを感じる。歩き始めると、足音が軽やかにこだまする。一番聞こえてくるのは、自分の身体の音・・・。これが、熊野古道を〝音〟で感じた最も深い記憶である。

私と熊野古道の縁を結んでくれたのは、田辺市立美術館に勤務する学芸員の方々である。田辺市立美術館・田辺市立図書館が2018年3月に主催した連続講座『森と芸術』に招聘されたことが縁となり、同年1月と3月に熊野古道近辺をフィールドワークする機会に恵まれた。

私にとって熊野古道は、聖地のような宗教空間で、俗世からかけ離れた特別な場所といったイメージがあった。しかし実際訪れてみると、人里近い場所に道が存在し、周囲は明るく、生物としての安心感を得る生活空間であった。人の往来も頻繁で、コミュニティ・スペースのような安堵も感じ取ることができた。平安の時代から都人が、なぜ熊野の森に心を惹かれたのか、あるいは足繁く通い詰めたのかが、わかる気がした。

こうした「森が人に与える魅力」を、私の専門である〝サウンドスケープ（音風景）〟の切り口から、少しばかり解き明かしてみたい。森がもつ音の魅力は3つある。1つめは、人の聴覚を超えた音の成分（周波数）が多数存在していること。2つめは、多様な動植物の音が豊富に存在していること（響きの生物多様性）。そして3つめは、不意に音が現れること（予測不能な音刺激）である。ふだん私が生活している都市空間（京都市）では、なかなか出会うことのない音環境である。

人は日常生活を離れる機会を得ることで、自分の立ち位置を客観的に把握することができる。この現象はメタ認知と呼ばれ、退屈な日常を過ごしていると、そのモードになることは難しい。熊野古道を訪れる機会は私にとって、聴覚刺激による強烈なメタ認知が生み出されるきっかけとなった。その瞬間、人間の本源的な営為である「表現」という行動が生まれる。私の場合、聴感覚が蘇生されると曲が生まれる現象が起こるため、今回の熊野訪問によって、ピアノの組曲によるCD「熊野古道・天地（あまつち）」を生み出すこととなった。

熊野古道なかへち美術館の側を流れる日置川の音を採取する筆者　（2018年3月24日）

このアルバムはピアノ曲を主体としながら、〝音〟で感じた私の熊野古道における心動をリスナーの方にも追体験していただける構成となっている。大斎原の川音、冒頭で紹介した熊野古道の静寂の中を歩く音、那智の大滝の3つサウンドスケープをピアノ曲にブレンドして収録し、視覚をはじめとした身体感覚が立ち昇る工夫を凝らしている。

制作の過程でとりわけ印象深かったのは、学芸員の方々とのコラボレーションである。フィールドワークを共にし、熊野や音について語り合い、構成アイデアを交わし合い、互いの想いをあたためることからこの記念すべきアルバムは生まれた。熊野の音の旅は、私の音の表現と世界を新たな境地に引き上げる機会となった。この場をお借りして、関係各位に心からの感謝をお伝えしたい。

（作曲家／京都精華大学教授　小松　正史）

絵画と出会う「この一点!」

佐伯祐三と近代の洋画

会場：田辺市立美術館
会期：平成30年12月15日（土）～平成31年1月27日（日）

佐伯祐三（さえき・ゆうぞう／1898～1928）は作品に命を刻みつけるかのように、自らの芸術とともに疾走して、30歳の若さでパリに客死した。雨の中の屋外での制作の無理がたたり、1928（昭和3）年の3月から佐伯は病床につく。つかの間の回復時に描かれたのが、郵便配達の老人とロシアの少女をモデルにした数点の作品で、以後の制作はかなうことなく、8月にその生涯を閉じた。

図版の《郵便配達夫》はその最後の数点のうちの一つで、佐伯の数少ない人物像の一つでもある。直線で斜めに描かれる人物の体勢が生み出す画面の動きと、見開かれた目、そして左手に持たれた蝋燭か煙草のようなものの炎と煙からは、残された命を精一杯に燃焼しつくそうとでもするかような佐伯の気迫が感じられる。また、背景に描き込まれたリヒャルト・ワーグナーの演奏会のポスターは、あたかもこの空間にその楽曲が鳴り響くかのような効果をもって、画面に威厳を与えている。

今年は佐伯の逝去からちょうど90年を迎える年であり、同時に生誕120年の記念の年でもある。この機会に佐伯の作品を同時代の洋画家たちの作品とともに展観して、大正から昭和にかけて熱をおびた日本人の洋画表現を振り返りたいと思う。

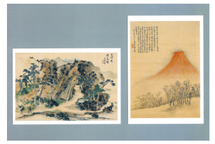
（学芸員　三谷　渉）

佐伯祐三《郵便配達夫》 1928（昭和3）年
大阪新美術館建設準備室

新しい絵ハガキ紹介と価格改定

この春から新しい絵はがき2種類を新たに販売しています。一つは桑山玉洲の《玉津嶋輿崖図》で和歌浦の玉津島神社周辺を描いたもの（写真左）、もう一つは野呂介石の《紅玉芙蓉峰図》で朝もやに映える富士山の姿を描いたもの（写真右）です。2点とも当館文人画コレクションのなかで特に人気の高い作品で、絵はがきのご所望も多くいただいていました。ぜひ一度お手にとってみてください。

また、熊野古道なかへち美術館が旧町立美術館時に収集した作品をあしらっている付箋紙3種（野長瀬晩花《スペインの田舎の子供》、渡瀬凌雲《猫》、《魚磯》）については、同館の開館20周年を機会に、販売価格を値下げしています。3種とも400円→200円（税込）とお求めやすくなっていますので一層のご利用をお待ちしています。　（企画員　大江　史）



田辺市立美術館NEWS **ORANGE** Vol.29
編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館
発行年月日：平成30年10月1日

田辺市立美術館
〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770　FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390　FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

本館は新庄総合公園で開催される「コスモスまつり」、分館は「近野まるかじり体験」、また両館とも「関西文化の日」にそれぞれ協賛して観覧料を無料とします。大勢の方のご来館をスタッフ全員でお迎えしたいと思います。
秋は各地で芸術関係のイベントが多数催されますが、当館の展覧会と関連のイベントもお見逃しなくしてください。
本紙がご鑑賞のおともになりましたら幸いです。　（担当F.O.）

田辺市立美術館NEWS
ORANGE
Vol.29

野長瀬晩花《南国女》
1916（大正5）年
田辺市立美術館蔵

作品紹介　野長瀬晩花《南国女》

野長瀬晩花は1889（明治22）年、現在の田辺市中辺路町近露に生まれました（本名は弘男）。13歳から大阪に出て中川蘆月に師事し、その後京都に移って谷口香嶠のもとで日本画家としての基礎を学びます。19歳のときに、新設された京都市立絵画専門学校に第1期生として入学しますが、学校にはほとんど通わず、やがて反官展の姿勢を示して独創的な作品を描き、個展を開いて世に問うてゆきます。《南国女》は、そうした活動をしていた時期、20歳代後半の晩花の作品です。

上辺に描かれた、富士山とおぼしき山と、出て行く船は、ここに描かれる女性が「南国から来た」のではなく、「南国へ行く」ことを暗示しているのでしょう。まとわれた着物の文様には、南方の伝説が上から下にかけてストーリー立てて描かれ、異文化の混交が奇抜に表現されています。

こうした伝統にとらわれない、個性を重視した晩花の表現と活動は、官展で新進の画家として活躍し始めていた京都市立絵画専門学校を卒業した同期生（晩花は中退）たちにも共感を呼び、親密な交流が生まれました。それはやがて、1918（大正7）年の「国画創作協会」の旗上げへと結びつき、30歳代に入った晩花も新たなステージで才能を大きく開花させます。

その「国画創作協会」の結成から、ちょうど80年となる1998（平成10）年、今も残る晩花の生家のほど近くに、熊野古道なかへち美術館（当時は中辺路町立、現在は田辺市立美術館分館）が開館し、今年20周年を迎えています。

（学芸員　三谷　渉）

鈴木昭男が誘う音

みなさんは熊野古道なかへち美術館の庭に置かれている、足のかたちにも、耳のかたちにも見えるマークが施されたプレートにお気づきでしたか。このマークを眺めていると、少し立ち止って耳を澄ませてみて、私たちを誘っているように思えてきます。

これは、日本におけるサウンド・アートの先駆者として知られる鈴木昭男（1941ー　）がつくった、「点音（おとだて）」のためのプレートで、2005（平成17）年に行った『点音in和歌山』（和歌山県立近代美術館、田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館が共催）の際に設けられたものです。「点音」とは、お茶の野点（のだて）にかけた鈴木の造語です。野点は野外で楽しむお茶のことですが、点音では屋外で耳を澄まして風景と音を楽しみます。近隣の近野小学校の校庭にも同じ点音のプレートが設置されていて、熊野古道なかへち美術館の点音プレートと、互いに向き合うかたちになっています。「聴く」ことが当地の風景を感受するよすがとなるように考えられています。

この「点音」を考案した鈴木は、1960年代から音と場についての探究を重ね、音のイベントやパフォーマンスを繰り広げてきました。

点音（おとだて）のためのプレート

「聴く」という行為を独自の思考と方法とで創造的な行為へと導く「場づくり」の手法によって、鈴木は「点音」のように、作品に接する人々をそれまで意識していなかった音を意識することへと、またさらには音を想像することにまで誘う活動を展開しています。

今年の10月10日に開館20周年を迎える熊野古道なかへち美術館で、この鈴木の作品による記念の特別展を開催します。鈴木が長年考え続けてきたという「音の内在」をテーマにした4つの新作が今回の展覧会で発表されます。美術館の内部には、展示室のサイズから導かれた音律を持つ鉄パイプのインスタレーション《内在（ないざい）》と、防音室を模したパネルの先にある《響（ひびき）》の空間、美術館の外部には、倒壊したギリシャのゼウス神殿からインスピレーションを得た《句（く）》、そして鈴木の活動の原点となった「階段」を再考して形象化した《階段（かいだん）》が設置されます。

熊野古道なかへち美術館の存する環境とともに着想されたこれらの作品によって、当地の魅力に改めて目を向けていただき、皆様それぞれの音を聴き、楽しんでいただけましたら、開館20周年の何よりの記念になることと思っています。

（学芸員　知野　季里穂）

《階段（かいだん）》制作にあたってのスケッチ

INFORMATION

開館20周年記念特別展　鈴木昭男 ― 内 在 ―
会　　場／熊野古道なかへち美術館
会　　期／平成30年10月6日（土）～11月25日（日）
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／毎週月曜日（ただし10月8日は開館）・10月9日（火）
観 覧 料／ 400円（320円）学生及び18歳未満の方は無料
※（　）内は20名様以上の団体割引料金です。

熊野古道なかへち美術館の休館について

11月25日に終了する、開館20周年記念特別展「鈴木昭男 ― 内 在 ―」の後、熊野古道なかへち美術館は来年の3月末まで施設改修を行うため休館いたします。この間ご迷惑をおかけしますが、どうぞご理解をお願いいたします。
リニューアルした美術館に、また皆様がご来館していただけることを期待しています。

REPORT　現代の織Ⅲ 朝倉美津子

当館では、現代的な織の造形を展開している日本の代表的な作家をシリーズで紹介してゆく特別展、『現代の織』を昨年度から開始しています。その第3回となる、朝倉美津子（1950ー　）の制作を特集する展覧会を、今年の7月から9月にかけて、田辺市立美術館展示室1・2で開催しました。素材となる糸の染めと織りの技術双方に独自の着想で取り組んできた朝倉の芸術を、最初期の1970年代の作品から、この展覧会のためにつくられた最新の作品まで、15点によって展観しました。

会期中には、作家から直に作品や創作についての話をうかがう、アーティストトークを二回開催しました。京都の染織文化を肌に感じながら成長した生い立ちや、オランダ留学時の体験なども交えた貴重な話をうかがうことができ、参加いただいた大勢の方々にも喜ばれて、たいへん充実した時間となりました。

また、朝倉が実際に染めて使用している糸を提供いただき、来館の方々が自身の手と創意で、その糸を透明のカプセルに詰めて、小さな作品をつくるコーナーをエントランスホールに設けました。こちらも好評で、寄せられたたくさんのカプセルをつないで、新たなタピスリーが生まれつつあります。このコーナーは展覧会終了後も継続していますので、ご来館の折にはぜひ皆さんのカプセルを追加してください。

（学芸員　三谷　渉）

ご来館の方々がつくった
「あさくらみつこの染め糸カプセル」で
カラフルなタピスリーが出来てゆきました

展示室で自身の創作について語る
朝倉美津子さん

秋野不矩の大いなる創作活動

戦後間もなくの1948（昭和23）年に、「我等は世界性に立脚する日本絵画の創造を期す」との綱領を掲げて、当時30歳から40歳代の気鋭の画家たちが新しい日本画の団体「創造美術」を旗上げしました。今年はそれからちょうど70年を迎えます。「創造美術」は後に、洋画、彫刻などの団体「新制作派協会」と合流して「新制作協会日本画部」となり、その後再び日本画の団体として独立し、現在に続く「創画会」へと発展してきました。70年の間にこの運動に関わった画家たちは皆、新しい時代の日本画の表現を追求して切磋琢磨し、その世界が大きく切り拓かれました。戦後から現在に至るまでの日本画の展開をうかがうとき、「創造美術」から「創画会」にかけての画家たちがなした活動と発表された作品の重みは抜きん出たものがあります。

当館では、その源流をつくった、「創造美術」創立会員たちの活動を振り返る展覧会を継続して開催してきています。山本丘人（1900～1986）、上村松篁（1902～2001）、奥村厚一（1904～1974）、吉岡堅二（1906～1990）に続いて取り上げるのは、今年が生誕110年となる秋野不矩（1908～2001）です。秋野は「創造美術」の結成に参画した女性の画家二人のうちの一人で、1999（平成11）年には文化勲章を受章しています。

93歳で生涯を閉じ、70余年に亘って絵筆を握り続けた秋野の画業には、二つの転機がありました。先に述べた、同志の画家たちとの「創造美術」の結成と、1962（昭和37）年のインド滞在です。今回の展覧会も、この二つを分岐点として、三つの章で秋野の芸術を振り返る構成としています。最初の章では、「創造美術」結成までの秋野の制作をうかがいます。静岡県磐田郡二俣町（現在の浜松市天竜区二俣町）に生まれ、19歳から画家の道を志して、千葉の石井林響（1884～1930）、京都の西山翠嶂（1879～1958）のもとで学び、帝国美術院展覧会、文部省美術展覧会などに入選、受賞を重ねて、画家としての地歩を固めていった時期で、秋野は伝統的な表現を吸収するとともに、近代的な表現への意欲も強くもって試行を重ねていました。

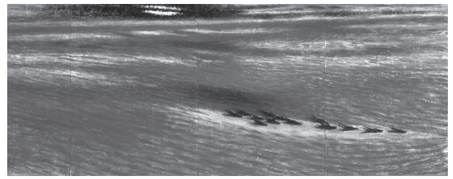
次の章では、戦後も旧態依然とした画壇の体質に危機感をもち、13人の画家で在野の団体「創造美術」を創立し公募展の主宰を開始してから、インドへ渡るまでの間の制作を見ます。秋野は果敢に新たな表現を切り拓くことに挑戦し、作品はより造形性の研ぎ澄まされた内容へと進化してゆきました。

最後の章で展観するのが、秋野の制作を代表するものとなっている、画業後半のインドの情景を主題とした作品です。秋野は1962（昭和37）年に大学の客員教授としてインドに一年間滞在し、この体験以後、作風が大きく変化しました。雄渾な大地の様や、過酷な自然の中に生きる動物たち、慎ましく信仰深い人々など、インドの多彩な姿が作品の主たるモチーフとなり、それらを力強い筆致とみずみずしい色彩で描き出す、秋野一流の表現が築き上げられました。

残念ながら画業前半の作品の多くが、二度の火災によって失われてしまっていますが、残った作品と、創作が飛躍的に展開した、インド滞在以降の画業を代表する作品の数々によって、秋野の大いなる創造の軌跡を振り返りたいと思います。

この展覧会は、今からちょうど20年前、秋野の故郷に開館した、浜松市秋野不矩美術館との共同で開催するものです。秋野不矩の芸術を堪能していただくことのできる、充実した内容になったかと思っています。皆様のご観覧をお待ちいたします。

（学芸員　三谷　渉）


秋野不矩《渡河》 1992（平成4）年　　浜松市秋野不矩美術館蔵

INFORMATION

生誕110年　秋野不矩（いのち） ― あふれる生命の輝き ―
会　　場／田辺市立美術館
会　　期／平成31年2月9日（土）～3月24日（日）
※会期中に一部作品の展示を行います。
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／毎週月曜日（ただし2月11日・3月21日は開館）
2月12日（火）・3月22日（火）
観 覧 料／ 600円（480円）学生及び18歳未満の方は無料
※（　）内は20名様以上の団体割引料金です。

REPORT　連続講座「森と芸術」森×音

今年の3月に図書館と共同で開催した連続講座『森と芸術』は、「森」との関わりの深い作品を制作している芸術家を招き、「森」の有する自然や歴史が現在とこれからの芸術創造に与えうる可能性について、改めて講師とともに考える機会をつくることを意図していました。前号では、文学をテーマにした講座「森×俳句」と、美術をテーマとした講座「森×彫刻」の内容を紹介しました。今号では、作曲家の小松正史さんにお越しいただいて、3月24日（土）に熊野古道なかへち美術館で開催した、音楽をテーマとする最後の講座「森×音」についてお伝えしたいと思います。

小松さんは、音楽だけではない「音」を対象にした研究と作曲活動を続けられています。講座は、これまで小松さんが行ってきた音と聴覚の研究や、それを生活に活かす活動についての話から始まり、途中からは美術館の外に出て、実際に当地の「音」に耳を澄ませてみるワークショップを行いました。その後、事前に当地をフィールドワークして録音した音をもとに、葉の擦れる音や古道を歩く音などを紹介しながら、小松さんは「音」を通してうかがえる熊野の森の特徴と魅力について語ってくれました。

講座の最後には、今回の当地の取材からインスピレーションを受けて作曲された「熊野古道組曲」の一部が、小松さん自身のピアノ演奏で披露されました。講座開催の時点ではまだ制作途中だったこの組曲ですが、その後間もなく完成し、7月7日にCDアルバムとしてリリースされました。田辺市立美術館や熊野古道なかへち美術館の他に、市内の書店などでも販売されていますので、ぜひお求めいただいて、小松さんのピアノと当地の音風景が織りなす音楽に耳を傾けていただければと思います。私もしばしばこの音楽に癒されています。

（学芸員　知野　季里穂）

鈴木昭男の点音（おとだて）プレートを
使ってのワークショップ

講座が機縁となって生まれたCD
「熊野古道組曲」（2,700円・税込）

熊野古道なかへち美術館20年の歩み

1998年10月10日
中辺路町立熊野古道なかへち美術館開館

10月10日～11月8日
開館記念特別展「始まりのご挨拶展」を開催

2003年6月3日～7月6日
館蔵品展「渡瀬凌雲展」を開催
会期中に開館以来通算5万人目の来館者を迎える

9月23日～11月3日
開館5周年記念特別展「野長瀬晩花・渡瀬凌雲展―記録に残したいもの」を開催

11月16日～12月17日
開館5周年記念特別展「妹島和世＋西沢立衛／SANAA展」を開催

2005年5月1日
市町村合併により田辺市立美術館の分館として新たな活動を始める

2008年4月26日～7月6日
開館10周年記念特別展「渡瀬凌雲展」を開催

10月10日～12月7日
開館10周年記念特別展「野長瀬晩花展」を本館と共同で開催

2011年10月8日～11月22日
台風12号による道路被害のため臨時休館

2012年10月1日～2013年1月31日
改修工事を行う（ガラス面・壁面・屋根）

2013年4月13日～7月7日
開館15周年記念特別展「渡瀬凌雲展」を本館と共同で開催

10月10日～12月23日
開館15周年記念特別展「妹島和世＋西沢立衛／SANAA展」を開催
会期中に開館以来通算10万人目の来館者を迎える

2015年4月18日～6月28日
田辺市合併10周年記念展「墨に彩られた世界～文人画・禅画・南画～」を開催

9月19日～11月8日
田辺市合併10周年記念展「色彩が魅せる世界～洋画・水彩画・近代日本画～」を開催

2018年4月1日
旧中辺路町立美術館時に収集した作品を田辺市立美術館のコレクションに統合し「旧中辺路町立熊野古道なかへち美術館コレクション」（略称「なかへちコレクション」）の名称を付す

10月6日～11月25日
開館20周年記念特別展「鈴木昭男 ― 内 在 ―」を開催

熊野古道なかへち美術館の設計者
妹島和世＋西沢立衛／SANAA

1995年に妹島和世（1956ー　）と西沢立衛（1966ー　）の共同の事務所として設立。最初に手掛けた美術館建築が熊野古道なかへち美術館である。その後、金沢21世紀美術館（石川県／2004年）、ニューミュージアム（ニューヨーク、アメリカ／2007年）、ルーブル・ランス（ランス、フランス／2012年）などの美術館建築を設計。2010年にプリツカー賞を受賞。
シンプルで透明性のある素材を多用した、軽やかな外観の建築を特徴とする。従来の建築概念にとらわれず、建築と環境、建築と人間との関係性を見直し続けている。